

熊本への視察

代表取締役 澤元教哲

皆様明けましておめでとうござ
います。昨年は浅間神社の重要文化
財・大歳御祖神社本殿屋根保存修理
工事をさせていただき、昨春には国
の認可をとった石場建て工法の竹
林寺様本堂の上棟が無事にすみ、よ
い年を迎えることができました。こ
れも皆様のおかげと心よりお礼を
申し上げます。



会長より義援金を手渡しました

さて私は昨年の一二月に浜松仏
教会の熊本への視察旅行へお誘い

をいただき、参加させていただきました。
視察の目的は今年の四月の二回にわたる大
地震で被害を受けたご寺院へ義援金をお届
けするためです。

初日の佛山寺様（臨済宗妙心寺派）は大
分県湯布院町で震源地から少し離れている
ためか、壁が落ちていた程度の被害ですん
でいました。二日目に訪れた大慈寺様は熊
本市南区の曹洞宗のご寺院で、元九州本山
で修行道場として僧堂もあります。大慈寺
様も最初の地震では建物の被害が少なかつ
たようですが、二回目の本震で大きく傾い
てしまったそうです。現在は壁が所々落ち、
本堂は応急処置として傾きを直してありま
したが、これから本格的な修復に取り掛か
る予定だそうです。中でも私が一番印象に
残っているのは鐘楼です。鐘楼の柱が四本
とも礎盤ごと六〇cmほどとんで、そのまま
建っていたことです。（下の写真参照）

私はかねてより足固め（柱の下部で柱と
柱を繋ぐ部材）をつけて、足元を固定しな
い方がいいと思っていました。この鐘楼も
足元がとめてなかったおかげで、鐘楼はな
んともなく修復にも手間がかかりません。
ボルトなどで固定してあったら鐘楼は倒れ
ていたかもしれません。また近隣の寺院の
ご住職のはなしも聞くことができました。



沓石から 60 cmほどのところに、礎盤
と柱がとんだ様子

「一回目の地震では大丈夫だったけど、二
回目の地震の時には倒壊するのではと思い、
奥さんをおいてあわてて外へ逃げてしまっ
た。」と笑いながら話されましたが、奥さん
も無事だったので笑い話ですんでよかったですね。

熊本地震は大きな地震が二回くるという、
今までは考えられないことがおき、改め
て地震の恐ろしさを感じたものです。この
ようなことが日本のどこにでも起こりうる
と思うと、地震に対する日々の備えの重要
性をひしひしと感じます。そして弊社は寺
院建築を通して皆様の生命と財産を守る重
要な仕事をしていることを、肝に命じ今後
ともしっかりと仕事をさせていただきます。

龍雲寺様・大庫裡再建工事上棟式



現場へ移動して、大工による工匠の儀と餅蒔きが行われました。工匠の儀は槌打ちの儀・鳴弦の儀・散米の儀と進められ、槌打ちの儀では木村棟梁の声が高らかに響き、見学の皆様より拍手喝采でした。これから平成二九年八月完成を目指し、安全を最優先に工事を進めてまいります。

浜松市入野町の龍雲寺様では一月一九日に大庫裡再建工事の上棟式が行われました。当日は朝から雨が降り続き上棟式が危ぶまれましたが、檀家の皆様の願いが通じたようで式の予定の三時頃には雨が上がり青空が広がってきました。

上棟式の法要は本堂内で行い、ご本尊の阿弥陀様に工事の報告と安全を祈願いたしました。その後は工事



蓮華寺様では四脚門の落慶式



昨年の一〇月に上棟式を行った駿東郡清水町の蓮華寺様（高野山真言宗）の四脚門が完成し、一月二〇日に落慶式が行われました。落慶式に先立ち一七日には山号額の取り付けも無事に済み、屋外で行われた落慶式ですが、一月二月にしては暖かく過しやすい日でした。

この四脚門は蓮華寺様の檀家である、古泉巖氏の一寄進により建築されました。古泉氏は農学博士で麻布獣医科大学生化学教授等を務められた方です。落慶式には檀家総代とともに古泉氏の一族の方も参列しておられました。このような古泉氏の喜捨の心には頭が下がる思いです。そして弊社もそのお手伝いできたことを、心よりうれしく思います。



「子供への取組」

日本テンプレヴァン(株)井上拓郎

「教育」

あけましておめでとうございます。本年も皆様に有意義な情報をお届けできるよう、執筆をおこなって参りますので、宜しくお願い申し上げます。

日本の識字率は、九九%と言われており、現代では義務教育として、公立の小学校や中学校、高校などで誰でも平等に学ぶことができるため、当たり前のことのように思います。義務教育の無かった江戸時代でも、寺子屋のおかげで、識字率は高かったと言われております。この識字率ですが、国連が発表する教育指数を算出するうえでの目安となっております、この教育指数や経済発展などの要素を比較し、先進国か発展途上国であるかを判断しております。

日本は、GDP（国内総生産）が世界第三位の経済大国ですが、厚生労働省が発表した国民生活基礎調査（二〇一四年七月）によると、「相対的貧困率」は、一六・一%、これらの世帯で暮らす一八歳未満の子供を対象とした「子供の貧困率」は、一六・三%となっております。つまり六人に一人は貧困という現実があります。

また貧困は、教育格差と密接に関係しており、世帯年収と児童の正答率や、親の収入と子の高校卒業後の進路に関係していることを文部科学省が公表しております。

親の収入が少ないと、一定水準以上の教育を受けられず、子供の学力を向上させる機会を奪うこととなり、その結果、大学に進学しなかったり（出来なかったり）、低所得の職業につくことになってしまいます。そしてまた、その子供たちも同じ環境の連鎖が発生することになってしまいます。そんな子供の貧困問題について、お寺で様々な取り組みが行なわれていることを、皆さんはご存知でしょうか？

「お寺での取組」

子供の貧困問題については、政府も新しい法律を施行し、対策を図っておりますが、まだまだ世間で認知されておられません。そこで、行政とは別なる地域での取組（ご寺院等での取組）を、ご紹介したいと思います。

①子ども食堂ネットワーク

定期的に無料、または安価で食事を提供しています。運営者や場所は、民間の飲食店の方もいれば、NPO法人、寺院や神社、教会など様々な方が運営しております。

もともとは、一人親の子供や貧困でご飯を満足に食べられない子供たちへ温かいご飯を提供するために、食材などを提供してくれる方々のネットワークで始まりました。私の知っているご寺院さんでも、場所を提供されておりますが、その地域に根差した活動だと思えます。

②おてらおやつクラブ

お寺にお供えされたさまざまな物（お菓子や果物などの食品から日用品まで）を、仏様のおさがりとして頂戴し、一人親家庭に支援をする団体を通して、お裾分けする活動をしています。参加されているご寺院は、全国で五一六ヶ寺。お裾分けを頂いている子供は四四〇〇人居るそうです。（二〇一六年一二月時点）

色々な活動がありますが、どちらの活動も、もともとはお寺で一般的に行なっていたことではないでしょうか？寺子屋などでご飯が食べられない子供がいれば、食事を振舞い、食べるものに困ったお檀家がいれば、米や食材をお裾分けする。これらが本来の施しの意味なのだと思います。まだまだお寺には出来る事が沢山あると思います。

一年の活動では、大きな変化は無いかもしれませんが、五年、一〇年、二〇年と経った時に、大きな変化となることでしょう。

家紋の話 知って得する

今回は家紋について調べてみました。家紋のおこりは平安時代の中頃、京都の公家たちが自分の衣服や牛車に、好みの文様などを入れたのが始まりのようです。たとえば徳大路家で木瓜（もっこう）を、西園寺家では巴（ともえ）を用いました。そのうち武家でも用いるようになり、清和源氏の武田氏が「割り菱」などを用いたのが、武家が家紋を用いた古い例です。

鎌倉時代になると武家は戦場で敵味方の区別をつけるため、実用的な立場から家紋を用いるようになりました。そして家名が増えるから当然家紋も増えていきます。同系の家は宗家や主流とわけるため一部のデザインを変えたりしました。たとえば葉脈の数を多くしたり輪郭を細くしたりして、同系の紋でも二〇種、三〇種と多くなったのです。これが近世になり庶民に一般に広まり、家の印として公私ともに認められるようになりました。現在調査されているところでは約二万種ほどあるようで、西洋の紋章（エンブレム）も日本の家紋に及びません。そればかりか西洋では貴族のシンボルでありますが、日本では庶民に広まり特権階級の専用

物ではありません。

菊紋などは天皇家でご使用の紋ですが、その数は今では一六〇種以上もあります。菊紋が皇室の紋章として用いられようになったのは、鎌倉初期の後鳥羽上皇がことのほか菊を好み、自らの印として愛用し、先例を重んじる公家社会において後代の天皇方もそれを踏襲され、鎌倉時代中期には定着したものと考えられています。江戸時代には幕府により葵紋とは対照的に使用は自由とされ、一般庶民に浸透し和菓子や仏具の飾り金具が作られなどして各地に広まっていきました。

次に昨年の大河ドラマ「真田丸」をご覧になった方も多いとおもいますが、真田家の家紋は六文銭が有名です。家紋用語では六連銭というそうです。六連銭を家紋とする意味は、諸説あるようですが、六文銭が三途の川の渡し賃であることから、いつでも死ぬ覚悟はできている、死を恐れず決死の覚悟で戦うという意味があるのではと考えられています。

真田家では六連銭の家紋は主に戦の時の旗印として使用され、それ以外の時は「結び雁金」・「州浜」の家紋が使われ

ていましたが、次第に六連銭を使うことが多くなったようです。ちなみにこの家紋は真田家だけの家紋ではなく海野氏や深井氏も同じ家紋です。

そして今年の大河ドラマは浜松を舞台にして柴咲コウさんを主役に「おんな城主 直虎」ですが、この井伊家の家紋は橘紋で、日本十大家紋に数えられるほどポピュラーで、井伊橘紋といえます。井伊家の初代当主が井戸の側に捨てられ、そこに橘があつたことから家紋になったのではという説もあります。橘は昔から日本に生息する常緑樹で生命力や長寿のシンボルとされてきました。

この直虎は女性ながら後継ぎのいない井伊家の当主になり、井伊谷城の城主として優れた手腕を発揮し、彦根藩の初代藩主で、徳川四天王・徳川十六神将・徳川三傑とわれた井伊直政の養母となった女性のドラマです。直虎ゆかりの地も浜松市内には多くあるようなので、この機会に大勢の方に浜松を訪れていただきたいものです。

